

マーセル・セロー氏 来日記念トークイベント

——マーセル・セロー『極北』を語る

二〇一二年一月五日 中央公論新社にて開催

〈ゼロ一氏による FAR NORTH の朗読〉

——日本語版『極北』79ページ（第九章冒頭）より——

〈トーク〉

ありがとうございます。今日ここに来ることができて、とてもうれいしいです。大変な名誉だと思っております。長い道のりを経てここに至りました。いま紹介にもあつたと思いますが、今夜皆さんにお会いするため、高尾山からずっと歩いて来ました。

日曜日に出発しました。「東京を歩く」というテーマで記事を書くことになっていて、それで高尾山から歩いてみたのです。気持ちよく歩けましたから、皆さんにもぜひお勧めしたいです。

東京を訪れるのは今回が二度目ですが、四年前、最初に来たときには、奇しくもこの『極北』の校正をしていたのです。先ほど本の一部を朗読して思い出したのですが……四年前には新宿のホテルに滞在していて、そこで本の校正をするというのは奇妙な体験でした。ともあれ、どうやらこの小説の運命は日本と結びついていよう、改めてここへ足を運ぶことになりました。

この日本版にはとても満足しています。『極北』のあらゆる版の中でも、もっとも美しく、この本の精神であると私が考えているものをよくとらえていると思います。

この本について、どのようにしてこの作品を書くに至ったかについて、少しお話しと思いますが、そもそも私は、何か美しいものをつくりたいという思いで執筆しています。そういう意味で、この日本版は非常に成功していると思うのです。

学生のころの化学の時間に、大きな結晶をつくるという実験がありました。日本の高校の化学の授業でも、同じように結晶をつくるかどうかわかりませんが。

必要なものは二つです。まず、しかるべき物質を溶かした過飽和溶液。それから「種」となる小さな結晶。溶液の中に、ちょうどいいタイミングでこの結晶を沈めるのです。

『極北』を生み出すことになった過飽和溶液と結晶について、これからお話ししたいと思います。

この本を書き始めたのは、二〇〇六年のことでした。

その前の六、七年間は、旧ソヴィエト地域で多くの時間を過ごしました。ウクライナを訪れ、チェルノブイリや北シベリアにも行きました。

二〇〇〇年に初めてチェルノブイリを訪れたのは、原発事故についてのドキュメンタリーを制作するためでした。

原子炉周辺の立ち入り禁止区域では、年配の人たちが戻ってきて暮らしていました。

汚染のひどい土地で、そこで生活することは禁じられていました。けれども政府は、彼らが住むことを容認していました。七十代と高齢だったので、汚染されたキノコなどをたくさん食べたとしても、健康への悪影響はそれほど大きくないだろうと考えたからです。

私はガリーナ・ペトロヴナという女性に出会いました。そこに住んでいた七十代の女性です。彼女の暮らしぶりは非常に印象的でした。すでに二十一世紀に入っていたというのに、十九世紀の人のような生活を送っていたからです。

彼女は自分が食べる野菜を自分で育て、キャベツを収穫して、酢漬けにしていました。服を自分で繕っていました。自給自足の暮らしをしていたのです。

少し見下したような言い方になるかもしれませんが、この女性は、イタリア出身の私の祖母の母のような人なのかもしれないと思いました。過去の人間のイメージだと思いました。昔の人はこのように暮らしていたのだろうと思ったのです。

続く数年間、私はほかのドキュメンタリーの制作に関わったのですが、そのひとつが気候変動や地球温暖化に関するものでした。

そのためにチュルノブイリを再訪し、アラスカやインドなど、気候変動の危機に直面している場所も訪れました。

そして、ジェームズ・ラブロックという非常に興味深いイギリス人科学者に会ったのです。

ジェームズ・ラブロックは、地球という惑星があたかもひとつの生命体のように自己調節システムを備えているという考えを提唱した人です。ギリシア神話の女神にちなんで「ガイア」と名づけられた理論です。

ラブロックは、私たちが大気中に排出している二酸化炭素の量から、この惑星の行く末について非常に暗い予測をたてていました。

彼の著作を読み、話を聞くうちに、私はチェルノブイリで出会ったガリーナ・ペトロヴナについての考えを改めることになったのです。

それまで私は、飛行機に乗ったこともあれば外国を訪れたこともあり、携帯電話やコンピュータやインターネットを使いこなせる自分が、とても現代的な人間であると自負していました。ところが、大災害が起こったあとの世界で生き抜くために必要な技能を、何ひとつ持ち合わせていないことに気づいたのです。そういう技能の一切を備えているのは、ガリーナ・ペトロヴナでした。

これはある意味で、進歩というものの代償なのかもしれません。私たちの能力は特化され、各人はひとつの、ごくごく狭い分野に精通しています。一方、私たちの祖先は何でも自分でできました。食用の植物や動物を育て、衣服をつくり、馬に蹄鉄をつけることができたのです。

このようなことについて私は考え、思いをめぐらせていました。

そして二〇〇六年四月のある日、私は机に向かって仕事をしようとしていました。

私は創作用の特別な日記をつけていて、執筆がうまくいかないときには、この日記に書き込みます。妻が愚痴を聞かされずにすむように。要するに、一冊まるごと文句ばかりです。

そのときも日記に不平をつづり、自分に向かって、物事はうまくいかないけれども、何とかがらなくちゃいけない、銃をベルトに差し、このうらぶれた街の巡回に出なくてはならない、と書いたのです。

ところが、この一文を書いたとたん、これは自分らしからぬ文章だと思いました。私よりもずっとストイックで、タフで、才覚がありそうだなと。私に語りかけようとしているこの人物は誰だろう、と考えました。

そこでこの一文を別の紙に書き出してみました。するとまた別の一文が浮かんできました――

「毎日、何挺かの銃をベルトに差し、私はこのうらぶれた街の巡回に出かける。

ずいぶん長いあいだ同じことを続けているので、身体がすっかりそれに馴れてしまった。寒
冷な空気の中で、せっせとバケツを運び続けてきた手と同じように」

何が起こっているのかわからないまま、その声に導かれるようにして、私はひとつの道をたどっていったのです。

声に導かれて、未来への旅に出ました。そこでは、ガリーナ・ペトロヴナのような人物は、過去の人ではないのです。それどころか、私の娘の未来の姿なのかもしれないと思いました。

それが水溶液に沈めた小さな結晶となり、私が考えていたさまざまな物事がそのまわりに自ずと集まって、大きな結晶に育ちました。

そのようにしてこの本を書くに至ったわけです。そしてこの本は、私にたくさんの良きことをもたらしてくれました。この本にはとても満足しています。おかげでいろいろなことが——、いろいろな良いことがありました、とりわけうれしく思っているのは、こうしてこの本が日本で新たな生命を得たことです。

その上、作家として尊敬してやまない村上春樹さんというすばらしい翻訳者に恵まれたのは、言葉にならないほど光栄なことです。

そして、村上春樹という作家が、これほどに重要な位置を占めている日本の文学界に、この作品がつながりを持つことになるなんて、二〇〇六年に日記に愚痴を書きつけていたときには、想像もできなかったことです。

感謝しています。

〈Q&A〉

来場者 1 初めまして。楽しく本を読ませていただきました。このメイクピースという主人公が最後に子供を産むという結末になっています。私も去年の震災後に子供ができて、今年の初めに出産したのですが、危険に身をさらしているということでメイクピースと重なる部分があって、原発事故のあと、私自身、日本にとどまって安全なのかどうか、そういった選択をしている中で、子供を産むということについても、すごく悩んだことがあります。私は家族という単位の中で子供を育てることができませんが、メイクピースはひとり子供を産んで育てなければいけない、そういった難しい状況に主人公を置いて……、そこに希望を持たせるということもあるわけですが、この先、彼女がもっと困難な道を歩むのではないかという心配もあって……うまくまとまらないのですけれども、なぜ子供を産むというストーリーにしたのかな、というところに、非常に興味がありました。

マーセル・セロー（以下MT）ご質問ありがとうございます。子供を産むというのは楽観的な

行為であり、未来に対する希望を表していると、私も思います。

ただ、親であることの恐ろしいところは、子供の将来が安泰であると確信することが決してできないことだと思います。そして親は誰でも、未来の不確実性を受け入れるようになるのだと思います。

私はそもそも、あるメッセージを伝えようと考えてこの本を書き始めたものではありません。メイクピースという人物にすっかり魅せられてしまったのです。

彼女のことが大好きになってしまって、本を書き終えたときにも、もうこれで彼女のことを書けないのはさびしいなと、何度も思ったほどです。

何より好きだったのは、彼女が非常に機知に富んだ人であることと、恐ろしい状況の中でも失われることのない彼女の樂觀性でした。

それは人間の資質の中でもっともすばらしいものではないでしょうか。自分にもそういう資質がもっとあったらと残念ですが、彼女がそういう人でよかったです。そのような資質があれば、恐ろしい惨事に直面しても、子供を育てようと思えるのですから。

彼女なら、どのような状況であれ、すばらしい母親になるだろうと私は確信していました。

来場者2 すばらしい講演をありがとうございます。あなたの小説を読み終えるのに丸三日かか

ったのですが、私にとって、ひとつの旅のような体験でした。厳密には質問ではありませんが、この作品についていくつかコメントしたいと思います。

まず、主人公のメイクピースは、たくさんの本を蓄えています。本を読もうとはしませんが、本を読もうとするたびに頭が痛くなるからです。私自身はリベラル・アーツを学ぶ学生ですが、あなたの本を読んで大変な衝撃を受けました。知識というものに対する見方が一変したからです。サバイバルに必要な基本的な知識さえ、私は身につけていないことが明らかです。自分がいかに知識のない人間であるかを痛感させられました。

もうひとつ、小説の中で描かれる「基地」と、そこでの人々の暮らしは、強制収容所を思い起こさせるものでした。二千年ほど前のギリシアやローマ時代の奴隷制について考えさせられました。その一方で、現代の都市居住者はずいぶん貴族的な生活を送っているように見えますが、地球との結びつきが断たれてしまっているように思えます。あるいは、私たちは知識というものについて再考しなければならぬ時期にきているのかもしれない。

このようなことについて考えさせられる、すばらしい作品でした。どうもありがとうございます。

MT ありがとうございます。コメントに感謝します。私もまさにそのようなことについて思い

をめぐらせていました。メイクピースが本を読まないということは、私が彼女とつきあっていて不満に感じた唯一の点です。それだけが、好きでなかったところでは。本を読まない人についての本は二度と書けないと思いました。その反動が、最近書き終えたばかりの作品です。本を読むこと以外はほとんど何もしない人物について書いたんです。そうやって、不満を解消することができました。

来場者3 先ほどメイクピースのことがどんどん好きになっていったというお話を聞いて思ったのですが、自分で生み出して書いた登場人物を、嫌いになったりするということはありませんか？

MT うーん……いい質問ですね。たしかに私は……登場人物は、たとえ悪人であろうとも、どこか好きなのかなければだめだと思います。悪人であればこそ、好きなのかなないと。いい人だから好きになるとは限らないし、でなければ、悪人たちと二年もの歳月を共にすることはできませんよね。

メイクピースは、私が生み出した人物の中でも、もっとも英雄的な資質を持っていると思います。彼女は人間の資質の中でも、もっともすばらしいものを備えています。彼女が自覚していないだけで。

来場者3 ありがとうございます。今とても感動しています。

来場者4 原発についてどう思われますか？ 昨年日本で起こった惨事についてはご存知でしょうが、あなたの本を読んで、恐怖を感じました。先の大災害とメイクピースの体験を重ね合わせただけからです。村上春樹さんが素晴らしいスピーチをしています。スペインで文学賞を受賞したときのことで、私たちは原爆を体験した世界で唯一の国でありながら原発をつくった、それがこのような結果をもたらした、というものです。地球上に原発が存在することについてどのように感じていらっしゃるか、聞かせてください。

MT すばらしい質問です。福島悲劇によって、私の本は、今日の重大な社会問題と関連づけられることになりました。そんなことになるなんて、まったく望んでいなかったことです。日本特有の歴史は、ここに原子力発電所が存在することが非常に困難な問題であることを意味しています。それに、地理的に見ても、地震活動がたいへん活発な場所ですから、（原発をもつことが）賢明なことなのかと考えさせられます。私は原子力の専門家ではありませんが、この国が地震の多発地帯にあるのは確かです。一方で、人間の文明はエネルギーを大量に消費します。私たちに

はエネルギーが必要です。それを石炭や太陽光だけでまかなえないとしたら、どこからエネルギーを得ればいいのか。

来場者4 詳しいことは省きますが、原子力発電以外から十分なエネルギーを得られることがわかっていきます。

MT これは大変な難問です。それにもうひとつ大きな問題があります。先日のアメリカ大統領選挙では、どちらの候補者も「気候変動」という言葉を使いたがらず、このことに言及しませんでした。見て見ぬふりをしたのです。

来場者5 まず、すばらしい小説をありがとうございます。非常にディストピア的な小説ですが、ある意味で、気持ちを高揚させる作品でもありました。私も妻も、とても気に入りました。

この会場で配布された資料にもある（マーセルが出演した）BBC放送のドキュメンタリー番組「In Search of Wabi Sabi（わびさびを探して）」を観たのですが、その中で、「わびさび」というのはなんだろうと、それを探しに日本に来て、東京だけじゃなくて、福井だったり京都だったりに行ったという話でしたけれども、正直な感想はどうでしたか。期待していたような「わびさ

び」が、あまり見つからなかったような感じだったのですが。

MT「わびさび」とは何かを定義してくれと言われるんじゃないかと、びくびくしていました。その質問をしないでくれて、ありがとうございます。

「わびさび」は、見つかったと思います。そう思います。私が考えていたものとはちがっていたような気がします。私が話をした人の多くは、「わびさび」に強い思い入れがありました。私がか今でも関心を持っているテーマです。日本には審美にかかわる独特のポキャブラリーがあるのも興味深いことです。「わびさび」「さび」「きれいさび」や「もののあはれ」などがありますよね。これらに相当する概念は私たちにはなく、置き換えられる言葉がありません。それでも、私たちも経験はしていると思うのです。私は「もののあはれ」とはどのような感覚かがわかる気はしますが、説明することができません。私が日本に魅力を感じるの、同じ経験であっても、それを私たちとは異なる言葉で言い表しているからです。

「茶の湯」については、もともと私は非常に懐疑的でした。ところが番組の制作後には、そこでは何かとても親密で奥深いことが起こっていると考えるようになりました。それから、以前は理解していなかったのが、それがコミュニケーションであるということ。茶の湯とは、参加者同士のコミュニケーションなのです。

芸術様式の中には、もったいぶった、尊大なものもあります。しかし、理想的な本とは、小さな茶室のようなものかもしれません。腰を屈めてその中に入ると、そこは作家と読者の二人だけの空間で、非常に深い交流が生まれるのです。そして人間であることの本当の意味を教えてくれるのです。

来場者5 その日本滞在で、たしか最後に禅寺か何かに行つて、修行もされたのですよね。例えばその経験が *FAR NORTH* の最終の段階の校正に影響を与えたということはあるでしょうか。例えばお坊さんたちのシンプルな生活だったり、プラグマティックなところとか、影響を与えたということはあるでしょうか。

MT その段階では本の校正はすんでいたのですが、そのときの経験については、今も考えています。ほんの二十四時間か、もうちょっと長いという程度の体験でしたが、修行は厳しく苛酷なものでした。それについては、よく考えています。どのようなかたちはわかりませんが……それは経験として私の中に蓄えられています。影響を受けたことはたしかですが、どのような影響だったかという、はつきりとはわかりません。

福井県の宝慶寺でした。いつかまた訪れたいと思っています。

来場者6 手作りの弾丸と、武器庫に収められた本というのは、何かのメタファーなのでしょうか？

MT いいえ、それは弾丸であり本そのものです。メタファーではありませんが、本と弾丸は、彼女の過去と結びつきがあり、未来にとって重要だと彼女が考えているものではありませんね。

来場者7 いつもどのようなスタイルで小説を執筆されているのですか？

MT 朝です。朝がいいんですよ。九時ごろからです。九時から昼食までの時間が重要なんです。たしか村上さんも朝五時に起きるんですよ。私とは時間帯がちがうけど。同じく作家の私の父（ポール・セロー）も朝型。朝書いて、午後にも書くけど、大事なのは午前中の時間ですね。

翻訳・構成 星野真理 + 編集部

*〈Q & A〉は質疑応答とサイン会の際のやりとりから再構成

Copyright © 2012 by Chuokoron-Shinsha, Inc.

本文書の無断転載を禁じます